手にコース①⊥⑥の白鳳峠への道が分岐し、さらに10分、広河原峠への登り口となる。ここは砂防堤がいくつも作られた沢なのですぐにわかる。これからあとは、アツクリ沢、ミヨシ沢、アサヨ沢、石小屋沢とすべて右からの沢をすぎて行く。やがて左手、小太郎尾根方面から扇沢の流入を見ると、林道はまもなく北沢出合に着く。右から入る北沢は荒川に次ぐ大きさの野呂川の支流で、林道はこの北沢の左岸にそってのびている。約一㌔ほどで北沢橋、コンクリートの橋で北沢を右岸に渡る。リムジンバスでアプローチ消化の人はここで下車、北沢峠から逆にくだって来た人も同様である。

今度は北沢の右岸にそってくだる林道をまた北沢出合近くまでたどり、ふたたび野呂川の左岸高みにつけられた林道で上流に向かうことになる。この林道は仙丈岳の山裾をまいて、小仙丈沢、大仙丈沢、奥仙丈沢などをすぎて、えんえんと奥につづいている。若干のくだりはあるがだいたいゆるやかな登りである。

奥仙丈沢をすぎると、まもなく右岸からは前白根沢が入ってくる。さらに下奥沢を見送ると両岸はしだいにせばまり、ますます深山のおもむきが色濃くなってくる。林道も少しずつ流れに近づいてきて、やがて終点である。少し先には土止め工事をした崩壊地があり、そこまで林道がついているが、この手前から河床近くに下りるようになっている。

林道の路肩を一段下り、さらに樹林帯へと入っていく。野呂川の左岸、河原近く踏まれた道は、昭和57年夏の台風で若干荒れたが、まもなく前方がひらけてきて、行手に尾根上の空が見えるようになると、すぐ両俣小屋である。やはり昭和57年の台風で倒壊したが、応急修理されている。

翌日はコース①⊥⑨の三峰岳方面、または左俣から北岳へ向かうコースがあるが、計画によってどちらを選んでもよい。小屋番に上部の状況を聞くことも大切である。

撮影のポイント

このコースはすべて谷筋なので、山を写すというより野呂川の流れや枝沢、それに山肌などがカメラの対象となる。したがって季節は秋がもっとも適し、次いで新緑の候となる。

広河原から奥の山肌は、針葉樹のほかにカンバ、カエデ、カツラなどが多く、白鳳渓谷に劣らぬ景観をあらわす。全体を写しこむには三五㎜程度の広角か標準レンズでよく、長焦点レンズで山肌の部分撮りもおもしろい。光線状態は北沢橋までは午前中が登り午後はくだりのコースがよく北沢橋と両俣間はともにくだりコースで午後の方がすぐれている。だが、山肌の向きによって異なるので、あまり気にすることはない。

早川尾根と鳳凰三山

甲斐駒ガ岳に起こって六方石をへて駒津峰に至った甲斐駒山脈は、ここで双児山への尾根を分岐して、主脈は仙水峠にくだる。

早川尾根と呼ばれる一群の山々はここからはじまり、まず栗沢ノ頭を起こしてのち、岩稜を連ねて最高点アサヨ峰（浅夜峰・朝与岳二七九九㍍）となる。東に折れた山稜はミヨシと呼ばれるピークをへて、グッと高度をさげ、早川尾根ノ頭から、さらにくだりつづけて、最低鞍部広河原峠にくる。ここでやや高度を持ち直して赤薙沢ノ頭を隆起させるが、また白鳳峠にくだって、ようやく鳳凰山塊と接続する。

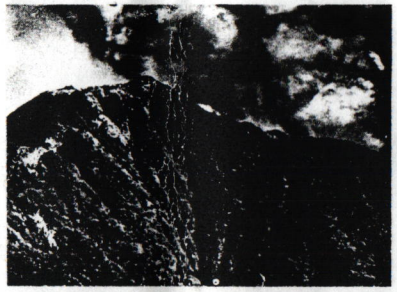
同じく甲斐駒山脈に属する鳳凰三山は、ふつう最高点観音岳二八四一㍍を中心に、地蔵岳、薬師岳の二山を加えて三山と呼ぶが、実際は、地蔵岳の西につらなる赤抜沢ノ頭と高嶺、それに薬師岳の南には砂払岳があって、辻山から夜叉神峠につづいている。

この一連の山並みは、甲斐駒山脈に特有の閃雲花崗岩で山体が構成され、その露頭は随所にあらわれている。ことに鳳凰山塊は、全山が白砂青松の美を誇り、さらに地蔵岳や薬師岳の特異な岩塔で耳目を引いている。

この地蔵仏といわれる地蔵岳の岩塔は鳳凰をめぐる山の上からはもちろん、甲府盆地や釜無川の岸を走る国道二〇号線からも望見され、甲斐駒の重厚な山容とはまたちがった意味で人々の人気を集めている。

この二つの山塊からは甲斐駒から八ガ岳をへて奥秩父、大菩薩連嶺、さらには御坂山塊から富士山に至るまで一望のうちにあるが、何といっても圧巻なのは野呂川の深谷をへだてて聳え立つ三峰三山の偉容である。三〇〇〇㍍の峰頭が連互する壮観さは他に比類のないすばらしさだ。

山小屋や登山道は、甲斐駒とならんで早くから整備され、小屋には四季を通じて番人が入っている。



高嶺から見た観音岳

⑥早川尾根から鳳凰・青木鉱泉

★★

白砂青松の山稜と豪快な展望

日程＝3泊4日　歩行＝第2日5時間50分　第3日4時間30分　第4日6時間　マップ＝20・21・56・57ページ　五万図＝市野瀬・韮崎　二万五千図＝仙丈ガ岳・甲斐駒ガ岳・長坂上条・鳳凰山

この早川尾根縦走は、鳳凰山塊とは非常に密接な関係にある。仙水峠から縦走すれば、鳳凰にぬけてくだらなければならず、逆コースの場合は鳳凰から取り付くか、夜叉神峠から鳳凰をぬけて来なければならない。ただ最近は広河原へのバス乗入れや、南ア・スーパー林道の延長で、広河原から白鳳峠や広河原峠へ登ったり、またはその逆コースで下山する人も増えて来た。

コース1—②の甲斐駒を越えるもの、1—③の戸台から北沢峠を経て双児山に登らぬものと二本ある。体力的にはコース1—③の方がはるかに楽であるが、山をガッチリ楽しむには1—②の方が断然すぐれている。

仙水峠は累々たる岩塊によって一種異様な感動を体験するところである。峠から西につづく岩原と対象的に、東方大武川の谷は深く落ちこみ、風に逆らって立つ古木を前景に甲斐駒摩利支天の岩峰が、高く高く虚空に突き上げている。

南方に盛りあがる岩塊上に積まれたケルンは年ごとに増えていくようだ。栗沢ノ頭への登りは、このケルンを過ぎて樹林帯に入ることからはじまる。木々の間から見えかくれする甲斐駒を振り返りながら、意外と早く黒木の林をぬけ出る。ダケカンバやミヤマハンノキに変わった道は相も変わらず鉄砲登り、背後には一歩ごとに高くなる摩利支天峰がすばらしいながめだ。

登りついた栗沢ノ頭は巨岩で形成され、三六〇度の展望は、どこといって非の打ちどころがない。絶好のカメラサイトである。

小さなくだりから、岩稜とハイマツの間に道はゆるやかに高度をあげていく。岩場というほどのものではない岩場、ダケカンバの急斜面、岩尾根の裾をまわって越える箇所。それらをすぎるとアサヨ峰の肩につく。山頂は右手の奥にあり、縦走路はここから急激に東に折れている。

アサヨ峰の展望は、何といっても北岳である。大きく山裾をめぐる野呂川から斜上した山稜は、ほとんど完全な三角形をなして北岳の頂稜に這いあがっている。山！という字がまさに形となってそこにあらわれたかのようである。

山頂からは、北岳に面した尾根に入りこまぬようにして急な道を東に向かえば肩からの道と合してミヨシノ頭との鞍部にくだっていく。鞍部までは小さな一枚岩などがあり、くだり切れば、ダケカンバの間を小さく右寄りの登りとなる。鳳凰の右に富士山をながめながら、次のピークに移ると、ここでまた尾根は左に曲がり早川尾根小屋をはるかにのぞんでのち、樹林中の急下降となる。倒木なども出てくるすべりやすい道をすぎて、小さなピークへの登りは、土が掘れて登りにくいが、登り切るとあとは稜

第❷日　北沢峠から早川尾根小屋

北沢峠（1時間20分↓↑1時間）仙水峠（1時間30分↓↑1時間）栗沢ノ頭（1時間↓↑1時間）アサヨ峰（2時間↓↑3時間）早川尾根小屋（泊）

早川尾根の北の起点である仙水峠までは、

早川尾根小屋と北岳

宿泊

早川尾根ノ頭の南方直下にある早川尾根小屋☎〇五五一35二〇四八は7月上旬から8月下旬まで営業。ドンドコ沢入口の青木鉱泉☎〇四二二51二三一三は4月1日から11月いっぱいまで。地蔵岳ドのドンドコ沢源流のところにある鳳凰小屋☎〇五五一27二〇二八は3月中旬から1月中旬、小武川奥の御座石鉱泉は通年開設で、連絡先は☎〇五五一27二〇一八と直通☎同25二九二七。

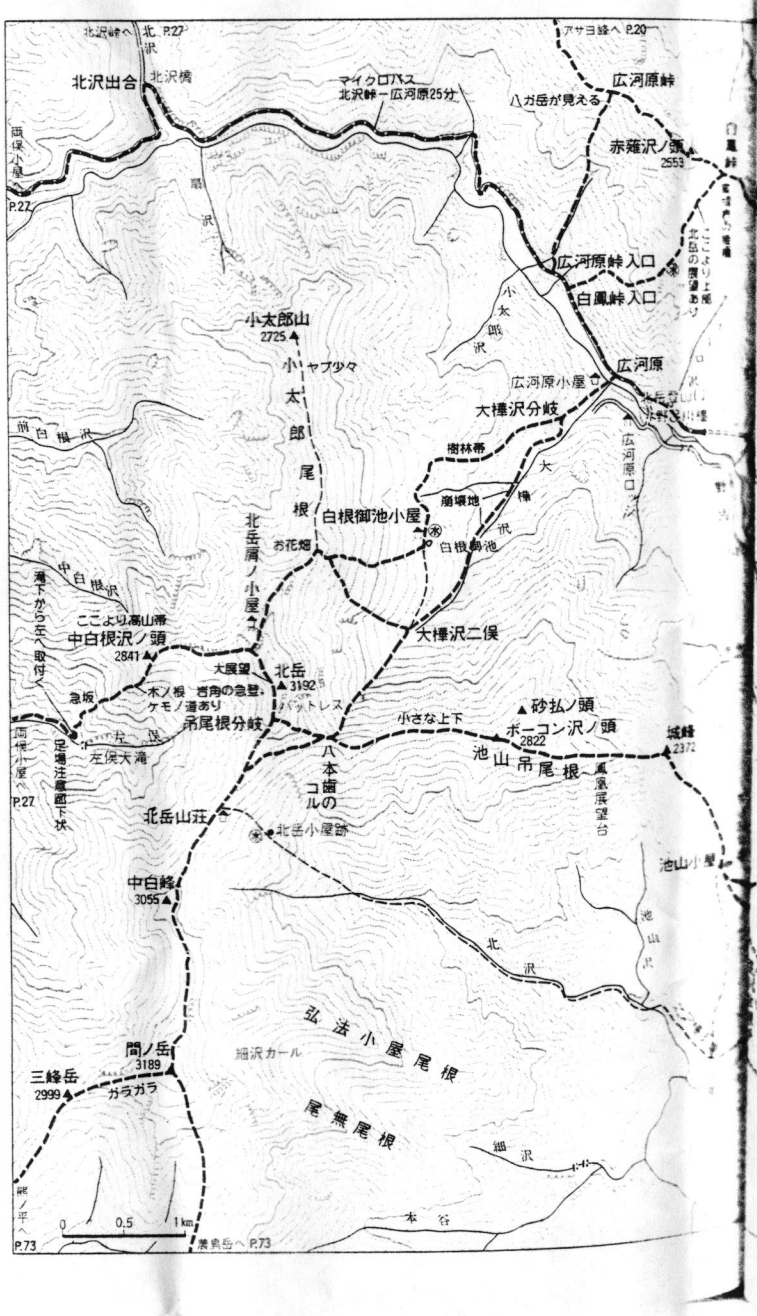
●詳しくは、巻末202ページの宿泊施設一覧を参照のこと。

仙水峠から見た摩利支天峰

宿泊

仙水峠までは、各項を参照。早川尾根小屋も北御室小屋付近も張る場所は少ない。鳳凰小屋付近には指定地がある（一人二〇〇円）。そのほか、青木ノ湯付近（一人二〇〇円）、御座石鉱泉付近（特定料金）

地蔵岳下にある鳳凰小屋


北沢峠へ 北 P.27
北沢出合
北沢橋
マイクロバス
北沢峠ー広河原25分
八ガ岳が見える
広河原峠
アサヨ峰へ P.20
赤薙沢ノ頭
2553
白鳳峠
広河原峠入口
白鳳峠入口
小太郎山
2725
小太郎尾根
ヤブ少々
広河原小屋
広河原
大樺沢分岐
樹林帯
崩壊地
白根御池小屋
白根御池
お花畑
北岳肩ノ小屋
中白根沢ノ頭
2841
ここより高山帯
大展望
北岳
3192
バットレス
木ノ根 岩角の急登
ケモノ道あり
吊尾根分岐
急坂
足場注意 転下状
左俣大滝
大樺沢二俣
砂払ノ頭
小さな上下
ボーコン沢ノ頭
2822
池山吊尾根
城峰
2372
八本歯のコル
北岳山荘
北岳小屋跡
中白峰
3055
間ノ岳
3189
三峰岳
2999
ガラガラ
細沢カール
弘法小屋尾根
尾無尾根
細沢
本谷
0 0.5 1km
P.73
農鳥岳へ P.73
P.27
早川尾根・北岳
御座石鉱泉へ
旭岳
西平
燕頭山
2105
牛首
朝・八ガ岳の展望
穴山橋へ
平川峠
青木鉱泉へ
地蔵岳
サイノ河原
鳳凰小屋
北御室小屋(荒廃)
樹間より滝の眺めよし
赤抜沢ノ頭
鳳凰三山
観音岳
2841
五色ノ滝
白糸ノ滝
南精進ノ滝
ドロ沢
丸沢
薬師岳
2780
ピーク2つあり
薬師岳小屋
砂払岳
ここより森林限界
南御室小屋
P.175
山腹のトラバース
辻山
2585
苺平
千頭星山
2139
林道(野呂川林道)
野呂川
山火事跡
展望良 植林済
深沢吊橋は使用不可
深沢下降点
深沢吊橋
大崖頭山
杖立峠
鷲ノ住山
天皇皇后御野立所
夜叉神峠小屋
アザミ沢
観音経トンネル
崩壊要注意
西登山口
夜叉神峠
夜叉神トンネル
夜叉神峠入口
夜叉神峠入口
P.177
甲府へ

線散歩で二つばかり小さな上下を繰り返す。

やがて、ふたたび早川尾根の小屋を望見する下り口に来ると、あとは針葉樹林帯のくだりから、平坦な道となる。早川尾根ノ頭はピークともいえぬ小さな登りですぎて、右寄りにくだれば、早川尾根の小屋につく。

すぎ去った幾多の山旅の思い出、駒、仙丈、北岳らに囲まれた、この素朴な小屋は、両俣小屋や、駒六合石室とともにもっとも南アルプス的なよさを残している。甲斐駒からの縦走ならば日いっぱい、北沢峠からでは少し時間的に早いだろうが、これから鳳凰までは少々強行となる。いずれにしても、この恵まれた環境にある山小屋で静かな一夜を経験してほしいものだ。

第❸日　早川尾根小屋から鳳凰小屋

早川尾根小屋（2時間↓↑2時間10分）白鳳峠（2時間↓↑1時間）赤抜沢ノ頭（30分↓↑50分）鳳凰小屋（泊）

早川尾根小屋での朝は、まず北岳や仙丈岳のモルゲンロートからはじまる。真紅に燃えた雲が、やがて色あせれば出発だ。

ゆるやかにくだる道は途中で一度展望のきく小さな頭に出て、そのまま広河原峠にくだっていく。さし交わした木々の梢からのぞむ八ガ岳は、また別の感慨を抱かせることと思う。

峠の小平地へ右から登ってくる道は、サブ・コース・広河原から広河原峠の広河原からのものである。縦走路は前方に踏まれる登り道で赤薙沢ノ頭をめざす。まだかまだかと登るうち、右手に何箇所か、小さなガレが出てくる。カラマツを配して北岳の展望がすこぶるよい。このガレがあるから赤薙という名がついた、という人がいるが、これはちがう。大武川支流の赤薙沢源流のツメになっているからである。この、かつて広河原への玄関といわれた赤薙沢コースは、昭和34年の台風以来、廃道となり、歩く人もないまま、広河原峠に通ずる踏跡は

北沢小屋と仙丈岳

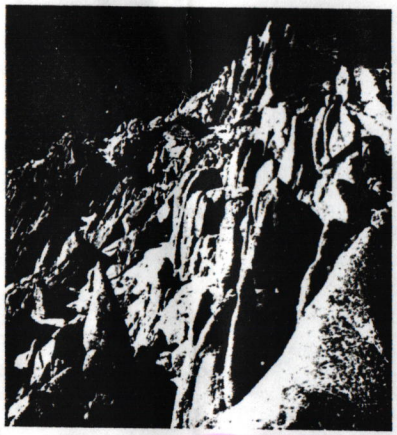
水場　仙水峠下の北沢小屋。早川尾根小屋は小屋の北に湧いている。あとは鳳凰小屋とドンドコ沢の流れである。

アドバイス　迷うところも、危険な箇所もないが、雨の降っている時や雨あがりにはすべりやすいところがある。栗沢ノ頭からアサヨ峰への岩場、アサヨ峰とミヨシノ頭のくだり、高嶺とドンドコ沢のくだりなどである。地蔵岳のオベリスクは、おもしろ半分に登るには危険である。

痕跡すら消えてしまった。

やっと頂上、大石の堆積は休憩にもってこいのところだが、もう少しがんばって白鳳峠までくだった方がよい。平らな道から樹林帯のくだりに入ると倒木が出てくるが、峠へはそれほど時間はかからない。

白鳳峠の標高は二四七〇㍍、三伏峠、福川乗越に次ぐ高い峠である。峠じたいに展望はないが、右手に少しくだると北岳が足元からのびあがって見える。あまり大きすぎて、なにかノッペリした感じがするくらいである。



白ザレが続く赤抜沢ノ頭

この広河原にくだる道（サブ・コース・広河原から白鳳峠参照）を見送っていよいよ鳳凰の山域に足を踏み入れる。シラベの林をぬけ出ると、すぐハイマツ帯となる。頭上にあおぐ高嶺の大きさにゲンナリしながら、変成岩の敷きつめられた尾根にケルンを追って急登する。この縦走中、栗沢ノ頭の登りに次ぐ苦しさである。

幅ひろい尾根から一転して、細い肩に出ると、さらに急な登りが待っている。天狗岳とも、ゴーロ沢ノ頭とも呼ぶ高嶺の頂上からは、大樺沢が北岳めざして、昇竜のようにのびあがり、ふり返れば仙丈、駒が高度をきそいあっている。

また東に向かった稜線はつねに左手に見て来た地蔵岳オベリスクを前方に置きかえ、赤抜沢ノ頭をめざしてのくだりとなる。くだりにくいところもあるが、危険はなく、

平川峠を越えて、トンドコ沢を登っても、一日で鳳凰に登りつく。二日目は早川尾根小屋、三日目は甲斐駒にぬけるなら北沢小屋、戸台方面ならば北沢峠付近の山小屋がよい。タイムは逆コースでもほとんど変わらない。

コースガイド　このガイドは本来1—③のものだが、スペースの関係もあり、ここで説明することにした。

北沢峠から北方、双児山方面に曲がらず南ア・スーパー林道をそのまま北沢方面にたどる。ほどなく山道が左に分かれ、樹林の中をくだり北沢のキャンプサイトに到着する。左手には北沢長衛小屋があり、仙水峠へはその前を通って北沢の流れを左岸へと渡る。しばらく左岸をたどったのち、また右岸へと戻るが、この先に小さいが高まく箇所なども出てくる。三度目に左岸に移ると急登になり、左寄りに北沢小屋の横をぬけていく。ここから樹林の中に入り、やがて

赤抜沢ノ頭から見た地蔵岳

白ザレの鞍部からすべりやすい道を踏む。あとは白砂の稜線をからんで赤抜沢ノ頭につき、ここで北岳や駒、仙丈らの山々に別れを告げる。

地蔵岳は、前方に突っ立ち、いよいよ怪奇だ。深く掘れた道をサイノ河原までくだり、オベリスクを往復する。もうあとは思い残すことなくくだりにかかろう。白ザレの斜面はグングン飛ばすには申し分ないところだ。

ザレ場の左手を注意してくだるうちに、鳳凰小屋への入口が見えてくる。ザレ場をトラバースして樹林に入りこみ、どんどん高度をさげると、やがて二棟ある鳳凰小屋が見えてくる。時間が早ければドンドコ沢をくだり切って青木鉱泉でゆっくり汗を流すのも魅力だが、時間的に遅い場合はこの鳳凰小屋に泊まることになる。ここから少し下の北御室小屋は荒廃していて宿泊不能だ。

第❹日　鳳凰小屋から青木鉱泉

鳳凰小屋（3時間↓↑5時間）青木鉱泉（3時間↓↑3時間20分）穴山橋（山交バス15分）韮崎駅

鳳凰小屋の前からドンドコ沢コースに入ると15分で荒れた北御室小屋につく、小屋の前からドンドコ沢を左岸に渡り、少し登ってから右に折れ、深い樹林の山腹をゆるやかに進む。ジグザグのくだりに入ると白ザレが何箇所かあらわれ、やがて右手にトラバースとなれば五色ノ滝分岐である。ここ

それを左へ曲がってぬけると仙水峠に続く岩原にとび出す。変成岩の堆積と疎林、岩上の踏跡ははっきりせず歩きにくいが、ほどなく仙水峠に登りつく。

撮影のポイント

第一に仙水峠、枯木を前景とした甲斐駒摩利支天峰の凄じいせり上がりがある。振り向いた仙丈岳もまた捨てがたいが、栗沢ノ頭へ登る間の摩利支天、仙水峠とまたちがった高度感をあらわして飽きることがない。

栗沢ノ頭からは摩利支天の上に甲斐駒が山頂を高くもたげ、南西方の北岳と高さを競うようになる。その北岳の右には仙丈岳がどっかりと座している。この三つの山は、アサヨ峰からさらに高さとボリュームを増して迫ってくるが、中でも北岳は圧巻で、その根張りの大きさ、垂直高度差にただ魅せられてしまうだろう。ここまでくると仙丈岳の小仙丈、大仙丈の二つのカールもはっきりと指摘できる。早川尾根小屋からは可登時玉剪の

を一ノ木戸といい、五色ノ滝は右奥に美しくかかっていて、思わず休みたくなるところだ。

ここからはドンドコ沢本流と支流とにはさまれたやせた小尾根をくだり、出合近くで左にまわって沢を渡り、またトラバースに入る。白ザレ二箇所をすぎ、ゆるいくだりから急激な左へのくだりとなり、尾根の左手を傾斜にそってくだると一ノ木戸である尾根上に出る。

ここが白糸ノ滝であるが、五色ノ滝に比して見るべき価値は少ない。ここからは尾根のくだり少々、左手にまわって暗い樹林のゴーロ上を急激にくだりつづける。やがて小沢を渡りガレを横切って、また前方の樹林へと入っていく。さらにジグザグのくだりから枝沢を越えてまわり、本流に近づくと南精進ノ滝展望台に到着する。七〇㍍の落差は花崗岩の岩床を深くえぐり、凄じい水声と飛沫をあげている。一休みしたら、青木鉱泉への道に入ろう。

ドンドコ沢の南精進ノ滝

平坦な樹林中から小沢を次々と越え、小さな上下のまじるトラバースから雑木林のくだりをへて旧青木湯跡にくだる。砂防堰堤の下を対岸に渡って、ようやく小武川の河原に出る。コースサインをつたってくだり、左岸の樹林中に道を見出せば、そのまま新旧二棟がある青木鉱泉の庭先に入っていく。

青木鉱泉からは小武川を渡って林道に出る。右岸ぞいに下って鳥居峠分岐、左岸に渡って御座石鉱泉分岐をすぎ、平川峠から穴山橋に出て、韮崎駅行きのバスをつかまえられるが、青木鉱泉のサービスカーがあるので、それを利用すれば1時間で韮崎駅まで送ってくれる。

この山容は赤薙沢ノ頭、白鳳峠、高嶺にかけ徐々にパノトレスが正面を向いてくる。高嶺から赤抜沢ノ頭にかけては正面に地蔵岳オベリスクが一足ごとに近づき、右手奥の観音岳もなかなか見ごたえある山容で写欲をそそる。

赤抜沢ノ頭からは何といっても白峰三山の威容、これは標準から準広角までのレンズがよく、振り返る地蔵岳と甲斐駒ガ岳は、このすぐ下のサイノ河原からのポイントとともに定評のある姿だ。

サイノ河原から続く、白ザレの斜面からの地蔵岳も広角でねらうに適したモチーフで、これは樹林を配してもよい。ドンドコ沢に入ってからはあまりカメラを取り出すようなところはないが、五色ノ滝と南精進ノ滝がしめくくりとなってくれる。